

2.1 キリスト教主義教育

【評価項目 1-0-1】 キリスト教主義教育

- (KG1) 学内のキリスト教教育の組織・態勢
- (KG2) 学内のキリスト教教育活動
- (KG3) 大学とキリスト教関係諸団体との関係

<2003年度に設定した目標>

1. キリスト教主義教育推進のための組織づくり
2. 関西学院独自のキリスト教教育カリキュラムの整備
3. キリスト教主義教育にかかわる人的資源の有効活用

(現状の説明)

本学の建学の理念であるキリスト教主義教育の最も具体的な活動は、単位認定を伴うプログラムとしては全学的に必修科目としてのキリスト教およびキリスト教諸科目、単位認定を伴わないが全学的な教育プログラムとしてなされているチャペルアワー、その他講演会、研究会などが展開されている。

その主要な担当者としては、神学部を除く各学部には置かれている宗教主事がキリスト教担当教員としての働きを担っている。上級科目としては神学部によってキリスト教のMDS（複数分野専攻コース）が提供され、そこには神学部教員、宗教主事などが協働してそれに当たっている。

宗教主事は同時にチャペルアワーの責任を負い、各学部には招聘されている宣教師とともに、各学部長の指示のもとそれぞれの学部においてチャペル運営に当たっている。また2004年度以後独立研究科を中心として各研究科学生のためのチャペルアワーも開かれ、大学宗教主事がその担当を行っている。また春（2回）、秋（2回）、クリスマスの年5回、全学の授業時間割を変更して1時間の時間をとっての全学合同チャペルを実施している。2004年現在チャペル実施回数としては、一週間に神学部5回、文学部3回、社会学部2回、法学部3回、経済学部5回、商学部4回、総合政策学部3回、理工学部2回、大学院1回と合計で一週間28回実施され、宗教主事、宣教師、学内外の教員などの講話、キリスト教関連学生団体提供のプログラムなどが提供されている。

キリスト教主義に基づく研究組織としては、キリスト教と文化研究センターが大学研究機関として組織され、センター長、センター副長を中心とする運営組織を形成し、主任研究員による共同研究を展開している。

なお、大学行政上のキリスト教主義教育の展開については、大学宗教主事が学長室スタッフとして設けられ、入学式、卒業式、学位授与式などの式典の担当、大学の各意思決定に際してのキリスト教主義的な立場からの検討などを行っている。

学外キリスト教団体との関わりは、主として宗教総主事によって行われ、日本キリスト教学校教育同盟、宣教協力協議会（CoC）関係学校協議会などのキリスト教主義学校の連携機関、また日本基督教団関係学校として教会的な関わりを維持している。

(点検・評価の結果)

1. 全学必修科目として提供されるキリスト教学は、目下全学共通カリキュラムなどを持たず、各担当者の専門領域を軸としてシラバスが組み立てられている。従って本学として学生に期待する基本的なキリスト教の共通理解などが整理されておらず、かならずしも大学での唯一の必修科目として期待される内容を満たしていない。従って評価基準も一様ではないきらいがある。

2. チャペルアワーに関しては、多くのキリスト教主義大学などでは、全学的に数名の宗教主任を置き、学部単位ではなく全学対象プログラムとして提供されることが多い中で、本学の学部宗教主事制、学部チャペル制は他に類をみない充実したプログラムである。しかも全学的に一時限目と二時限目の間30分をそれに当て、その時間には授業並びに大学公式行事を置かないという原則の下で、すべての学生にチャペル出席を保障している。

毎回出席を確認している商学部の場合、主たる出席者は1年生であり、年間を通して学年の約29%が出席している。また、全学的に見ると、学部のカウンターに配置及びチャペルで直接配付しているチャペル週報の部数から全体の10%程度の学生が出席していると考えられる。

チャペルアワーは全学年を対象として、本学の建学の理念を訴え、考えさせることを目的にするが、チャペル室の規模が平均して200名収容程度のもので、全学生の出席を期待できないこと、キリスト教学の受講者、つまり一年生がその対象という無意識的な前提が成り立っており、上級生の出席が確保しにくいこと、ただし、キリスト教学の成績との直接の連携をしておらず、チャペル出席を学生の意志に期待していること、朝一時限目の後という時間割設定が上級生の出席を難しくしていること、などから現状の出席者数となっている。

3. このように展開されるキリスト教教育活動の成果を判定する指標を現在大学は有していないし、またその評価は非常に困難である。大学におけるこの教育が決してキリスト教信仰者を形成することを意図するものではない。また大学のキリスト教科目が、単にキリスト教に関する知識を教授するのみでなく、それらを踏まえて自己の生き方、考え方、視点形成を批判的に深化させるものとしての側面を持つ以上、それを客観的に判断することの困難さが予想される。

その中で1999年10月に総合教育研究室が実施した「関西学院大学卒業生調査報告書」によると、スクールモットーへの意識としては全体で80.6%が「意識している」と回答しており、その報告書の中で「関学出身で良かった点としては『キリスト教（聖書）にふれる機会があった』『スクールモットーが行動の規範になっている』などといった『キリスト教主義教育』『スクールモットー』に関する肯定的な評価が意外に多く見られた。意外に感じる理由は、本研究室では2年に1回在学生調査を行っている。ここに寄せられる回答者の4割から5割がこの自由記述欄にいろいろな事を書いているが、この二つについての肯定的な記述が非常に稀であるからである」とその結果を記している。

つまり、現役の学生時代に行われる教育が、卒業後しばらくの年月を経て卒業生の人生において定着し、意味を持つ教育活動として、その成果を確認しうるものとする。

(改善の具体的方策)

1. 授業科目としては、キリスト教学のカリキュラム内容の全学的な調整であり、大学が進める関西学院大学スタンダードの設定が必要である。現在も大学宗教主事の懇談議決機関である大学宗教主事会において、授業内容に関する情報交換、教授内容の調整なども適宜行われているが、まだカリキュラム体系として整備されるにいたっていない。共通教科書ないし参考テキストの編集などもあわせて検討する。
2. チャペルについては、建学の精神を語る上で、それが関西学院大学の私学としての個性の形成に直結するものとして、大学構成員全体によって意識され、担われてゆくものとしての理解の学内全体への浸透がよりいっそう強力に図られるべきであって、そのために私学教職員としての各自の自覚、その上でキリスト教主義教育が全学構成員ともども担われる責務であるということの再確認が必要である。現在私学の個性が厳しく問われるこのときにこそ、チャペルアワーが有効に活用され、それを通じて関西学院大学というユニヴァーシティコミュニティの根幹となる本学のアイデンティティ意識が高められることが必須となる。